

◇目次◇

第15回ミニ HOHO の報告
 第2回インド CIB 会議のご案内
 IC 交流会の報告

ホームステイ体験記
 APYC レポート
 入会案内・編集後記他



第15回ミニ HOHO in 天城

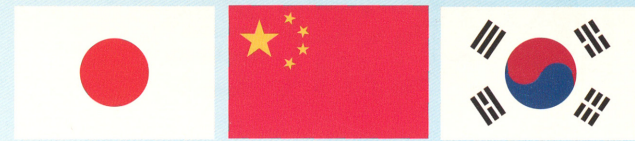
今年初めて伊豆半島・天城での開催となった第15回日本ミニ HOHO は、新鮮な空気と緑に囲まれたリゾートホテルのような研修施設に20名の様々な職業・年齢・国籍の方々が集って始まりました。プログラム内容は盛り沢山で、1日目の矢野弘典氏(国際 IC 日本協会会長)の講演では、土光敏夫氏から学んだ教訓を、エピソードを交え、あっという間に1時間半が過ぎてしまいました。“ストーリーテリングと傾聴”では、各メンバーの人生にわが身を置き換えて話に聴き入り、翌朝には、チェ・ヒジンさん(韓国 IC)の分かりやすい説明による「静かな時間」を体験し、その意義の深さを皆が感じました。最後に、チョン・ジソンさん(韓国 IC)のリードで親への手紙を書き、グループ各々が読み上げると、誰もが胸を熱くし、涙が頬を伝わる参加者もいました。どのプログラムもよく考えられた深い内容であり、貴重な体験を参加者一人ひとりに与えてくれるものでした。

◇今回のミニ HOHO 参加者の声◇

- *言葉に出して語ると自分自身を客観視できる、ということに気づきました。傾聴することによって、自分の考えが整理されてゆくのも発見でした。
- *日常生活において自分自身の本質についてじっくり考える機会はそうないので、とても為になった。
- *自分が幸せに生きてきたことに気づきました。



第6回 東北アジア青年フォーラム (日中韓青年フォーラム)



“得がたい友情” 有馬光俊 (立教大学4年)

去る8月24日から29日まで、ソウルのオリンピックパークテルに於いて、第6回東北アジア青年フォーラムが開催されました。今年のテーマは東北アジアの文化シルクロード構築のための青少年交流、まさに我々青少年のテーマであり、グループディスカッションなども個人の経験などを切り口に議論出来、比較的取り組みやすいものでした。そして、フォーラムのプログラム自体もテーマに沿うかたちで施設探訪、講演、議論、文化紹介から構成されており、日を経るごとにテーマへの理解が深まり、大いに議論の手助けとなりました。また、この議論の成果として発表があり、どれも充実したものであるとの自信もっています。このプログラムを通じて様々なものを得ることができましたが、その中で最も大きなものが交友関係であります。互いに同じ世代であり、親近感が湧くということもありますが、昼に真剣な議論を重ね、夜は共に遅くまで語り合うと、異なる価値観や宗教を超えて、旧知の間柄の様な関係になることが出来ます。このことを経験する度に、私自身、表現し難い喜ばしい感情になります。そういった気持ちで、最後まで過ごす事ができ、さらに帰国してからも写真の交換や、メール等で連絡を取り合いながら、ずっと友人でいたいと考えております。

“もっと語学ができれば” 中島康夫 (一橋大学2年)

今回初めての海外でしたが、国籍は違うけれど、あまりそれは関係ないと思いました。韓国の方とも今回共通の話題でお話することができました。もっと語学ができれば、もっとコミュニケーションをとることができ、さらに交流の輪が広がるのではと思います、それが一番学んだことでした。

“メッセンジャーとしての青少年の役割” 石原佑真 (早稲田大学2年)

韓国に着いたばかりで、日本語が通じないという状況の下で少し緊張ぎみのまま、フォーラムが始まりました。フォーラムの内容は、日中韓において共同体意識を阻害しているものとして歴史認識問題が存在しているが、これらは政治的アプローチのみでは埋めることが困難な、特に精神的な面での3国間のわだかまりがあるのではという意見が出され、それだからこそ、青少年による文化交流が必要であるという意見が出されました。青少年の思考の柔軟性などの点に、問題解決の糸口が見出されるという結論が導かれました。

また文化トレンドのメッセンジャーとしての青少年の役割、3国間の中で、他国の文化を受容し、自国に持ち帰ることで、文化トレンドを相互に伝達しあう、というような役割が青少年に期待できるのではという意見が出されたことが印象に残りました。



▲伝統衣装をまとった各国の青年たち

第2回インド IC との共催会議 (CIB)

「経済危機から新経済秩序へ—信頼と誠実さを
 共通のビジネス慣行として取り入れるには—」

期間: 11月20日(金) ~ 24日(火)

於: インド・パンチガーニ、アジアプラトー (IC センター)

◇日本の参加者の発表、進行も順調に進み、収穫の多い日程でした。詳細は次号のたよりに掲載予定です。



▲CIB2007 の写真

IC 交流会

ガンジーの精神を社会に活かすために

ショバナ・ラダクリシュナ女史（インド、DISHA のチーフエグゼクティブ）

◇ガンジーの行動とその精神

ガンジーという人は、インド史上最も劇的な人生を
生きた行動の人、3つの大陸を股にかけ、自分自身を
実験台として倦むことなく挑戦し続け、55年間以上の
間不断の活動を続けた人です。



行動の人、ガンジーの真実の定義とは、信ずるこ
とを言葉にし、実際の行動を通して実践することです
た。彼の行動を支えていたものとは一体何だったので
しょうか？それは、彼が幼少の頃より常に「良いこと」
を実践する習慣にあったようです。また、彼は人生で公私を区別することはありま
せんでした。彼は一人の人間として、常に実践活動に身を捧げた人でした。彼の行
動に隠されたもう一つの秘密は、時間を一瞬でも無駄にしない、一瞬一瞬を大切に
し、すべての時間を実践のために有意義なものにすること、そして決して一時でも
怠慢に過ぎることを「よし」とはしませんでした。

◇今日にも受け継がれるガンジーの精神

ガンジーの教えが今も受け継がれている、ブラジルのサンパウロでの実例をお話
します。ある時、スラム街の存在が問題となり、彼らを暴動の因子とみなして敵
対視し、彼らの暴動に対し武装しようという風潮が起こりました。その時、スラ
ム街の教会長クム神父が独り、21日間に亘っ



▲ IC ハウスに集う参加者の様子

て断食を始めたのです。当初これに対する周
囲の反応は冷たいものでした。しかし徐々に
同●して断食を始める者も現れたのです。そ
こで神父は言いました。「同情して1日断食を
する気がおありなら、そのかわりに、どうか
恵まれない貧しい人たちのために、自分の家を開

放し、一食でも食事を提供してくれないでしょうか」と。この言葉を次々と実践す
る者が現れ、1万もの世帯が飢餓に飢えた人々に食事を分け与えたのです。当初、

貧しいスラム街の人たちに対し武装すべ
きだとまで言われていた風潮が嘘のよう
に変わっていったのです。ガンジーの精
神を実践することで生まれる力の大きさを
見せつけられる今日の一例です。ガン
ジーは、真の力はこのように人々の中に
宿ると考えていました。（～10月4日 IC
交流会での講演より抜粋～）



▲（左から）講演者のラダクリシュナ女史、ラビ・
チョプラ氏（インド SWYAA India 事務総長）、
チェ・ヒジン（韓国 IC）

◇ホストファミリー体験記 新しい出会いに感謝して・・・

廣瀬 恭子（小田原市）

今回で縁があり、ホームステイをお受けしました。オリエンテーションを通じて IC の
理念や活動に初めて出会いました。IC の小学校訪問は、単なる異文化体験や交流ではなく、
自分の〈良い心に耳を傾ける〉等、子ども達が自分自身のことを考える素晴らしいプロ
グラムです。それらの活動を全てボランティアで行っていると聞き、改めて驚かされました。

我が家に來られたヒジンさんはとても日本語が堪能で、毎晩、韓国での親子関係や少
子高齢化・就職難・日本に対する思いなど話しを伺いながら、日本が抱えている問題がそ
のまま韓国にも共通すると思いました。何事にも熱心で自分自身に対し目標を持ち努力な
さっている彼女に「どうしてそんなに頑張れるの？」と伺うと、「以前の私は今とは違
いました。変わりたいと思っているだけでは何も変わりません。一歩行動を起こすこと、人
を変える前に私自身が変わること新たな関係に変わって行くと思います。こういう考え
を IC の出会いから学びました」と語ってくれました。

親子程年齢も離れており、育った国も違えけれど、考えや感じ方がとても共感でき、私
にとって近くて遠い国が身近になった瞬間で
した。世界平和と考えると難しいですが、私にもで
きること、それは「人と人との繋がりを大切にす
ること、そして私自身を知り相手の声に耳を傾け
ること」だと感じています。

我が家にヒジンさんが蒔いてくれた IC の種を育
て、身近な人から伝えていけたらと思っています。



～明るい未来のために国際的なネットワークで青年たちの交流活動を支援しています。
ただ今、2010年にインターンとして来日する各国の青年たちや、2010年5月の国際会
議に参加する若者たちのホームステイ先を世田谷区内のご近所で募集しています。
*朝食とベッド、そして温かく迎え入れてくださるファミリーの笑顔があれば充分です。
*ホームステイ・ファミリーにご関心のある方はぜひご連絡ください。
*お問い合わせは、TEL 03-5429-1156 / FAX 03-5429-1157
（社）国際 IC 日本協会事務局（世田谷区船橋 1-54-14）まで。

APYC（アジア太平洋青年会議）に参加して

上沼美由紀（(財)国際協力推進協会）

今年8月1～8日に台湾で開催された第15回 APYC に参加しました。今回特にお伝えし
たいことは、韓国・中国・台湾・日本の和解のための対話のことです。私たちはカルチャー
イベントで日本を紹介すること、対話のワークショップに参加することが今回の大きな
ミッションとなりました。

対話のワークショップでは、中国の参加者の一人が、日本人が参加するのなら、参加を辞
退すると言い出すなど、波乱の幕開けとなりました。彼は中国人でありながらチベットの民
族衣装を着るなど、柔軟で国際的な感覚を持ち合わせた立派な青年でしたが、その彼がこ
う言い出したことが驚きでした。しかし、別の中国人が、「僕も日本人によい印象を持ってい
なかったが、日本に来てその考えは変わった」と言ってくれ、話し合いの席につくことを勧
めてくれました。

今まで会ったこともない中国人に、過去の自分が実際手を下したことはないことで憎
みのまなざしを向けられても過去は変えられません。どうすることもできない虚しさを感じ、
変えられないことを思っ諦めかけていたところ、中国人の青年が、「日本人に対しての僕
の態度は間違っていたので赦してほしい」と謝罪の言葉を述べてきてくれました。このとき
私は、和解の扉は必ず開かれるのだという希望を強く感じ、私にとって本当に忘れられない
体験となりました。

回韓の友情の懸け橋を築くために

私は現在 IC 日本協会のインターン生とし
て日本で回韓の懸け橋となるべく活動し、忙
しくも充実した日々を過ごしています。

私と日本の出会いは10年前に遡ります。当
初は、韓国に対して日本が行った歴史的事柄
を日本人が知らないことに怒りを覚えていま
した。しかし継続して日本の一般家庭にホ
ムステイするなどの交流を行い、韓国の教科
書とは異なる視点から書かれた歴史書を多数
読むうちに、一般の日本人に罪はないこと、
日本の侵略を許した韓国側にも落ち度がある
ことが見えてきたのです。そして時が経つ中
で、私や日本の友人に様々な前向きな変化が
起こり、「日本と韓国の懸け橋になりたい」と
心に強く思うようになったのです。

今回は日本各地を訪問できたことで日本の文化や精神への理解を更に深められました。
8月に行われた日本、中国、韓国の学生向けフォーラムにスタッフとして参加した時は、
参加者同士に友情が芽生える様子を見て10年前の自分を思い出しました。今年芽生えた
友情が私たちのように長く続き、この地域と世界中によりよい未来が実現されることを
願ってやみません。

日本に来る前は懸け橋を築く構想を色々思い描いていましたが、正直に言うと、IC日
本協会の助けとなるような大きな足跡は残せていません。しかし、私はそのビジョンに向
けた行動を取り続けることで、いつかそれが実現できると信じています。

チョン・ジソン

*青年インターン研修生たちの活動は、(財)MRAハウスの助成により支えられております。

〈入会のご案内〉

当協会は皆様からの会費及び寄付金により運営されています。お寄せ頂いた浄財により
内外の未来を担う青年たちの育成に寄与することを希求しております。ぜひご入会頂き、
ICの活動にご参加・ご支援下さいますようお願い
致します。



▲ IC ハウス（東京都世田谷区）

- 正会員（議決権を行使できます）
- 個人会員 年額 6,000円
- 法人会員 年額 50,000円
- 賛助会員
- 個人会員 3,000円以上
- 法人会員 50,000円（一口）以上

- | | |
|--------------------------|----------------------|
| 会費・寄付金の振込先 | |
| 1. ゆうちょ銀行 〇一九店 当座預金 | 2. みずほ銀行渋谷中央支店 普通預金 |
| 口座番号 / 019-0038289 | 口座番号 / 162-4945790 |
| 口座名 / シェダノホジン コサライシニホキヨカ | 口座名 / 社団法人国際 IC 日本協会 |

@編集後記 今後は海外とのネットワークについての記事を掲
載したいと思います。本機関紙に関してご意見等がございましたら、(社)
国際 IC 日本協会までお寄せ下さいますようお願い申し上げます。
編集企画委員：高橋久子、長野清志、岡本さくら、弓場睦、チェ・ヒジン、
海老原真美